

論文

## 活用力を育成する古典授業の開発

—『平家物語』「扇の的」(中学校2年生)の場合—

Development of a Classical Literature Teaching Method to  
Nurture an “Ability to Put Learned Information into Practical Use”  
— In the case of “Ogi no Mato” from “The Tale of the Heike”  
for the 2<sup>nd</sup> Year of Junior High School —

武久 康高 (高知大学教育学部)

TAKEHISA Yasutaka

*Faculty of Education, Kochi University*

### ABSTRACT

The author is studying a learning method of classic literature materials in order to nurture the “ability to put learned information into practical use” In this paper, the author proposes a classic literature teaching method to nurture the “ability to put learned information into practical use” based on “Ogi no Mato” from “The Tale of the Heike” that appears in a textbook for the 2<sup>nd</sup> year of Junior High School.

## 1. はじめに

OECD が実施する PISA 調査（生徒の学習到達度調査）の目的は、読解の知識・技能を実生活で直面する諸課題においてどの程度活用できるかを評価することである。この PISA2003 調査における「読解力」の得点が低かった我が国では、2007 年より実施する全国学力・学習状況調査（文部科学省）において、従来の学力測定に準じた国語 A の問題に加え、PISA 調査と同様の「基礎的な知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力」について問う国語 B の問題を設定した。「PISA ショック」以降のこうした変化からは、(1) 生徒に必要な国語の学力として、知識の習得とともにその活用力が重視されるようになったこと、(2) そのため文部科学省は、全国学力・学習状況調査を通じて (1) に関する生徒の学力の現状を把握し、さらなる指導の充実や学習状況の改善を目指していることが窺える。

ところで、上記(1)のような状況は、新学習指導要領に設けられた「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の目的からも確認できる。そこでは「小学校、中学校及び高等学校を通じて」「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てる」こと、つまり小学校から高等学校までの古典の授業を通じて、児童生徒が伝統的な言語文化を理解（享受）するとともに、それを現代社会に継承・発展させること——いわば古典の読解や鑑賞に関する知識・技能を現代社会に活用することが謳われているからである。こうした「古典の読解に関する知識・技能の習得とその活用」を目指す古典学習は、(1)と同様の国語学力観のもとにあると見てよい。

だが、このように「知識・技能の習得」と「活用」の両者が「伝統的な言語文化に関する事項」の目的として示されているにも関わらず、多くの実践報告からは「知識・技能の習得」、つまり従来型の学力育成に力を注ぐ学校現場の現状が窺える。さらに全国学力・学習状況調査においても、古典そのもの（原文）が出題されるのは国語 A（知識の習得状況についての測定）のみであり、知識の活用力を問う国語 B において古典の原文は取り上げられていない。つまり、授業改善のために行われる全国学力・学習状況調査が想定する古典の学習も、「知識・技能の習得」がその中心となっているのである。

以上のような古典学習における「知識・技能の習得」偏重の原因は、〈古典読解に関する知識・技能の「活用」に関する学習モデル〉の開発がなされていないことにある。むろん一口に〈知識・技能の「活用」に関する学習モデル〉といっても、教材の種類や学年、授業のねらいなどによって様々なパターンが考えられる。そのため稿者は、各学年の教科書教材に準拠した、古典の活用力育成を目的とする学習モデルの開発を進めており、その一環として本稿では、『平家物語』「扇的」(中学 2 年生教科書教材)における「活

用力」(基礎的な知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力)の育成を目指した授業実践案を提示したい。

## 2. 『平家物語』の教材価値

『平家物語』はどのような教材価値をもっているのだろうか。この点についてまずは確認したい。

軍記物語である『平家物語』が題材とするのは、平安時代末期に起こった源平の争乱である。そこでは勇猛果敢な武士の姿や彼らの主従関係などが描かれている。だが中学生の教材として注目すべきは、そうした戦乱の中で露呈する人間の弱さや残された者の悲しみ、あるいは戦いの残酷さなど、勝敗を越え、戦いそのものがもたらす不幸にも『平家物語』が目向け語っている点である<sup>1)</sup>。

そもそも『平家物語』は、武家の時代が比較的安定を迎えたころに成立したとされている。そこで作者は、源平の争乱をはじめとした戦乱の世を振り返り、「あの戦いとはいったい何だったのか」という「過去への問いかけ」を行いつつ『平家物語』を作り上げたと考えられる。そしてこうした「過去への問いかけ」に対する作者の答えの一つが、叙上のような「戦いそのものがもたらす不幸」について目を向け、読者に語ることだったのである。

このように過去の戦いについて問いかける作者の姿勢は、同じく戦乱（第二次世界大戦）後の比較的安定した時代を生きている現代の中学生にとってぜひ学んで欲しいことである。ここに『平家物語』の教材としての価値がある。

教科書教材である「扇的」では、源平両軍が見守るなか、源氏方である東国の若武者・那須与一が扇的を射落とす場面が取り上げられている。そこではまず、源氏の名誉のために命をかけて挑む与一の悲壮な心境とその技芸のすばらしさが描かれている。また、射落とすことに成功すると、「沖には平家、舟端をたたいて感じたり。陸には源氏、えびらをたたいてどよめきたり」のように、その技芸に対して敵味方を越えて賞賛する武士たちの様子が描かれている。

その後、与一の技芸を称賛し舞を舞う「年五十ばかりなる男」が登場するが、その男と与一は義経の命で射殺してしまう。この行動にも源氏は「又、えびらを叫んでどよめくのだが、なかには「なさけなし」と感じる者もいた。

ここでの源氏方の射殺行為や「どよめき」は、「平家との戦いに勝つ」ことだけを考えると当然の行動であり反応である（これを勝つためには手段を選ばない「武士の論理」としておく）。しかし一方で、こうした味方の行動を「なさけなし」と感じる者もいた、と『平家物語』では伝えている。つまり本部分では、「武士の論理」のみならず、それに対する批判的意見も取り上げられているのである。

このように『平家物語』「扇的」では、本文を通じて「戦いに勝つこと」のみに意義が見出されているのではな

く、そうした勝利至上主義に対する否定的な見解や、そこから人と人が殺し合う「戦い」そのものに対する問いかけ（それは「(射殺行為に対して両様(肯定的・否定的)の反応をみせる源氏の姿)を描く作者の思い」を学習者に考えさせることで問題化できよう)も見出せる。そこに稿者は、中学生が『平家物語』「扇的」を学ぶ価値があると考えた。

なお、上記のような『平家物語』の教材価値を学習者に捉えさせるには、「扇的」とともに補助教材の活用が効果的である。そこで稿者は、以下の4場面を補助教材として提案したい(論文末に教材例を載せておく)。

#### ①敦盛最期

勝者の経験する葛藤(戦争における勝者もまた不幸であること)が描かれる。ここでは、息子と同年代の若武者を斬らざるをえなかった武士の葛藤が読み取れる。

#### ②知章最期

生に執着してしまう人間の弱さ(目の前で息子が殺されながら逃げてしまった親の後悔)が描かれる。ここでは、自分も殺されるという状況の中、息子を見殺しにして逃げてしまった親の後悔が読み取れる。

#### ③小宰相身投

夫に先立たれ、結局は身投げしてしまう女性の苦しみと悲しみが描かれる。ここでは、夫に先立たれ、残された女性の悲しい末路が読み取れる。

#### ④先帝身投

戦いに敗れて身投げさせられる幼い天皇の姿が描かれる。ここでは、戦いの犠牲になる哀れな子どもの姿が読み取れる。

以上のような、戦いにまつわる「人々の生き死に」の場面を補助教材とすることで、こうした「戦いの悲惨な現実」を語ることによる『平家物語』の問いかけ(戦いとはいったい何を人々にもたらすのか)に、より学習者をせまらせることができる。と考える。

### 3. 育成すべき「活用力」と単元の概要

では、前述のような教材価値にせまることを授業(『平家物語』「扇的」)の目的とする場合、そこではどのような「活用力」、つまり「基礎的な知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力」が育成できるのだろうか。

前節で述べたような『平家物語』の問いかけにせまるには、「物語内容(登場人物や出来事など)の語られ方に注目し、そこから作者の思いや作品の問いかけを考える」という「読み方」が必要である。PISA型「読解力」でいうところの「解釈」(書かれた情報がどのような意味を持つか理解したり推論したりすること)に分類される「読み方」であるが、これは『平家物語』をはじめとした古典作品に限らず、実生活で物語や小説を読む際にも必要とされる「読み方」と

いえる。

そこで稿者は、こうした「読み方」をはじめに学習(「習得」)し、それを『平家物語』の読解に活用するという実践——具体的には、教科書教材(『平家物語』「扇的」)を扱う第1次(4時間)の中でこの「読み方」などを学習(「習得」)し、補助教材(『平家物語』の4場面)を扱う第2次でその「読み方」を「活用」し『平家物語』の教材価値にせまる、という単元を構想し、実践した(高知大学附属中学校2年A~D組、2014年11月実施。授業者:今村有紀教諭)。以下、その概要を述べる。

【第1次】教科書(光村図書)を用いて『平家物語』「扇的」の学習を行った。ここでは、第1次で行った「習得」に関する2つの学習活動を例にあげる。

(1)琵琶法師によって語られた『平家物語』の特徴(非業の死を遂げた人々への哀惜の念を示したりその魂を沈めるため、琵琶法師によって各地で語られた)を押さえた上で、『平家物語』冒頭部分および「扇的」を音読する。これは「語り手の思いを押さえた上で、それを音読で表現する」といった、古典の音読に関する能力(知識・技能)の「習得」を目指した学習である(第2学年の指導事項である「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむ」ための能力(知識・技能)の「習得」)。

【第1時、第2時】  
(2)「年五十ばかりなる男」を射殺した与一の行為に対して、両様の反応(「あ、射たり」という反応と「なげなれ」という反応)が語られていることに注目して、こうした語りを行う作者の思いを考える。これは「人物や出来事の語られ方に注目して、そこから作者の思いや作品が読者に伝えたかったことを考える」といった、古典や物語を読むための能力(知識・技能=「読み方」)の「習得」を目指した学習である(第2学年の指導事項である「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像する」ための能力(知識・技能)の「習得」)。  
【第4時】  
以上のような学習を通じて、『平家物語』をはじめとした古典作品を「読むこと」に関する能力(知識・技能=「読み方」)の「習得」を目指した。

【第2次】第1次で「習得」した「読むこと」に関する能力(「読み方」)の「活用」を目的とした授業を行った。ここでは2つの学習活動を例にあげる。

(1)稿者が教材として作成した『平家物語』中の4場面(敦盛最期・知章最期・小宰相身投・先帝身投)から1つを選び、その場面を通じて作者が読者に伝えたかったことは何か、前時の学習(「読み方」を「習得」)を振り返りながら班で話し合う。さらにその「作者が伝えたかったこと」が伝わるような音読の仕方を班で考え、練習・発表する。これは、第1次で「習得」した2つのこと、つまり「人物や出来事の語られ方に注目して、そこから作者の思いや作品が読者に伝えたかったことを考える」といった能

力（知識・技能＝「読み方」と「語り手の思いを押さえた上で、それを音読で表現する」といった能力（知識・技能）を「活用」して行う学習である。 【第6時、第7時】  
 (2)単元のまとめとして、一斉授業で学習した「扇の的」や班活動・音読発表会で学習した4場面を通じて『平家物語』が伝えたかったことは何か捉え、それについて自分の考えを書く。これは、第1次で学んだ「人物や出来事の語られ方に注目して、そこから作者の思いや作品が

読者に伝えたかったことを考える」といった能力（知識・技能＝「読み方」）を「活用」し、「自ら考え、判断し、表現する」活動である（「習得」したことを「活用」することで、第2学年の指導事項である「文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと」を「学習」する） 【第7時】  
 以下、各時間の主な学習活動とそこで「習得」／「活用」する能力について表にまとめる。

次	時	主な学習活動	「習得」／「活用」する能力
第1次 習得	1	◆『平家物語』の概要を知り、冒頭部分の音読練習をする。 【上記、1次(1)の学習活動】 ・「扇の的」の場面に至るまでの経緯を教科書で確認する。	◆語り手の思いを押さえた上で、それを音読で表現する。【習得】
	2	・「扇の的」の場面の状況をつかむ。 ◆古典特有の表現に注意しながら、「扇の的」を音読する。 【上記、1次(1)の学習活動】	◆語り手の思いを押さえた上で、それを音読で表現する。【習得】
	3	◇与一が扇を射る時の状況や心情を読み取る。  ◇使われている表現の効果をj知る。	◇古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像する。【習得】  ◇例示や描写の効果を考え、内容の理解に役立てる。【習得】
	4	◆「扇の的」の最後の段落と「弓流し」の場面を読み、登場人物の心情や作者の思い、当時の人々のものの見方、考え方に触れる。 【上記、1次(2)の学習活動】	◆人物や出来事の語られ方に注目して、そこから作者の思いや作品の伝えたかったことを考える。【習得】
	5	・4つの場面（敦盛最期・知章最期・小宰相身投・先帝身投）を読み、班で1つの場面を選ぶ。	
第2次 活用	6	◆選んだ場面において、その場面で作者が読者に伝えたかったことは何か、班で話し合う。 【上記、2次(1)の学習活動】 ◆「その場面で作者が伝えたかったこと」が伝わるように音読の工夫をし、班で練習する。 【上記、2次(1)の学習活動】	◆人物や出来事の語られ方に注目して、そこから作者の思いや作品の伝えたかったことを考える。【活用】  ◆作者の思いを押さえた上で、それを音読で表現する。【活用】
	7	◆音読の発表会をする。 【上記、2次(1)の学習活動】 ◆「扇の的」や4つの場面を通じて『平家物語』が伝えたかったことは何か捉え、それについて自分の考えをもつ。 【上記、2次(2)の学習活動】	◆作者の思いを押さえた上で、それを音読で表現する。【活用】 ◆人物や出来事の語られ方に注目して、そこから作者の思いや作品の伝えたかったことを考える。【活用】 ◆文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつ。【活用】

※本稿で取り上げた「習得」および「活用」の学習を◆で示し、それ以外の学習を◇や・で示した

#### 4. 学習者の「活用」の実態

では、本単元を通じて学習者は、第1次で「習得」した能力（知識・技能＝「読み方」）を第2次においてどのように「活用」できているのだろうか。今回の実践では、第1次における学習者の記録を残していなかったため、「習得」から「活用」という一連のプロセスを通じた学習者の変化を検証することはできない。そこで本稿では、「単元のまとめ」（第7時、上記2次(2)の学習活動）として学習者が書いた文章の検討を通じて、彼らが「習得」した「読み方」を活用し、どのように『平家物語』が伝えたかったことを捉え、表現できているかについて分析したい。なお、高知大学附属中学校・今村有紀先生のご協力により、今回調

査できた学習者は多数におよぶ。そのため本稿では学習者のおおまかな傾向を把握することとどめ、より詳細な分析については後稿を期したい。

【「単元のまとめ」（上記、2次(2)の学習活動）での問い】  
 ●今回学習した「扇の的」、「敦盛最期」、「知章最期」、「小宰相身投」、「先帝身投」には、戦にまつわる様々な人々の「生き死に」が描かれていました。『平家物語』はこうした場面を通じて、読者にどのようなことを伝えたかったのでしょうか。今日発表した他班の考えも参考にして、自分の意見を書きなさい。

「単元のまとめ」において見られた「学習者の意見」の

特徴の一つは、それぞれの場面（教材）で語られている内容や登場人物の心情等は理解しつつも、そこから『平家物語』全体が伝えたかったことについてうまくまとめられていないことである。

①武士のきびしさや将軍であるがための決断。男だけでなく女性も悲しい思いをしている事。人を殺す意味やそこで悲しむ人物。簡単に人を殺していた事実。いろんなことを伝えたかったのだと思います。

②夫が亡くなったときの悲しみや子供を置いて逃げてきた親のはずかしさやくやしさ、相手に殺されるよりも自ら命をたったほうがいい、などという「戦いがな」と感じられないことを伝えたかったんだと思う。

これらは、それぞれの場面（教材）における「登場人物や出来事の語られ方」、あるいはその意味性については理解できている。しかし、そこから『平家物語』全体として伝えたかったことについて自分の意見が持てていないのである（例えば①「『平家物語』は」いろいろなことを伝えたかったなど）。つまりこれは、「扇的」の学習を通じて「場面」の「読み方」を「習得」したとしても、それを『平家物語』全体の読み取りに上手く「活用」できない学習者が少なからず存在したということを示している。学習者が「習得」したものを「活用」する場面において、もう少しきめ細かな指導や支援が必要であったと言える。

一方、『平家物語』が伝えたかったことに対する学習者の意見として多かったものに、〈『平家物語』は「命の大切さ」を伝えたかった〉というものがあつた。典型的な例をいくつかあげてみよう。

③小さい子どもなのに命を落とさないといけないことなど、悲しいことも書いていて、命の大切さを伝えたいと思った。

④幼くして命を失った人とか、悲しい死の場面で、人の命は大切なことだと伝えたかった。

③④から窺えるように、こうした学習者の意見は〈各場面（教材）で「登場人物の死」という悲しい出来事が描かれている〉＝〈「命の大切さ」を『平家物語』の作者は伝えようとしている〉といった単純な推論によるものである。同様の傾向を持つ意見の例をあげてみよう。

⑤武士の世界で生き抜いていくことの厳しさを伝えたかったんだと思います。殺さなくても良い人でも上の命令だったら殺さなければいけなかったり、自分の子どもを守ることもできないなど、武士の世界はとてもかこくだと思いました。

〔武士の世界で生き抜く厳しさ〕

⑥何でもかんでも殺すのではなく、人を思う気持ちも大切だということ。夫を思う妻の気持ち、息子を見捨てた父親の後悔の気持ちなど、人を思うことは大切なんだということを伝えたかったと思う。

〔人を思うことの大切さ〕

⑤⑥のような意見は、複数の場面（教材）から比較的容易に読み取れる登場人物の姿（「武士の大変さ」や「他人を思う人間の姿」）をもとに、『平家物語』が伝えたかったこと（「武士の世界で生き抜く厳しさ」や「人を思うことの大切さ」）を推論し書いたものである。ここでは、〈作品が読者に伝えたかったことを考える〉ために「登場人物の語られ方」に注目する」といった、第1次で「習得」した「読み方」が「活用」されている。しかしそれが、作品の読みや学習者の意見の深まりにはあまり活かされていないのである。

もちろん、学習者の意見の中にも「活用」を通じた読みの深まりを感じさせるものは存在する。

⑦扇的の黒革おどしの男と敦盛の死はとても対照的な気がした。それに小宰相と安徳天皇もまた、自分が選んだ死と死を強いられたという点で対照的だと思った。全員、戦というものに振り回された最後であることは共通していた。平家物語はいろいろな人の死に対する思いや残された人の思いを書いた物語だと思う。今とは戦い方が全然違うが、戦争はしてはいけないものと思った。〔戦に振り回された人々の姿〕

⑧戦いの中ではたくさん命がなくなるけれど、それらの人や武士にも、一つ一つ物語があること。誰かの命をなくして残される人の悲しみや自ら死ぬ人の気持ちなど。〔死にゆく人々の固有性〕

⑦では、〈「扇的」と「敦盛最期」で討たれる人物（「黒革おどしの男」と「敦盛」）、および〈「小宰相身投」と「先帝身投」で入水する人物（「小宰相」と「安徳天皇」）〉、それぞれの語られ方は対照的でありながら、これらの語りは「戦に振り回された人々のありよう」として意味づけることができるとしている。つまりこの学習者は、一見対照的に語られている出来事をより高次のレベルで統合・意味づけし、それを『平家物語』が伝えたかったこと（『平家物語』の問いかけ）として理解しているのである。また⑧は、本単元で扱ったような〈戦いにまつわる「人々の生き死に」の場面〉が『平家物語』では多数語られていること（「出来事の語られ方」の特徴）に注目し、そこから『平家物語』が伝えたかったこと（それぞれの死は決して一般化できず、死にゆく人にはそれぞれ固有の物語があること）へと理解が及んだものと言える。なお、こうした死者の語り方に対する意味づけは、学習者が既に持っていた「戦記物の語り」に関する知識と結びつくことで生じたものと考えられる。

以上、⑦⑧の学習者は「習得」から「活用」というプロセスを経て、『平家物語』の教材価値にせまりえていると言える。その他、「単元のまとめ」を通じて『平家物語』の教材価値を捉えていると思われる意見をいくつかあげておく。

・全てのものは最後には消えてしまうけれど、生きてい

る間は皆生きることに必死で、死ぬと必ず悲しむ人がいるということを波乱の時代を生き抜いた武士に重ね合わせて伝えたかったと思う。

〔武士の生き方に重ねて、人間の真実を伝える〕

- ・亡くなってしまう人も家族・友達など、たくさんの人とつながっていて、その人の心情やまわりの人達の心情を伝えたかった。他人の命、自分の命を大切に思うことは、今も昔も変わらないことであり、人と人をつなげるということ。

〔自他の命への愛おしみが人と人をつなげる〕

- ・「戦」というものは残酷だということ。いつも死がつきまとっている。しかし、今までなかった、人を思うことを教えてくれることもある。だから、平家物語は「人を思う心」を持つことが大切だと伝えたかったんだと思う。

〔極限を描くから伝えられる「人を思う」大切さ〕

- ・武士の誇りであったり、命の大切さ、何を守ろうとしていたのかがみんなの発表を聞いて伝わってきました。なので、登場人物は「一人一人に思いがある」と伝えたかったのかなと思いました。

〔勝敗だけでなく、一人一人の思いの存在を描く〕

- ・戦の時代に生き、戦のために命を落としていったたくさんの人がいることを忘れずに、今ある自分の命を大切にしてほしい。〔戦記物をなぜ書くのか／読むのか〕

\*

以上、「単元のまとめ」において学習者が、「習得」した「読み方」を「活用」しつつ『平家物語』が伝えたかったことをいかに考え、表現しているかについて概観した。その結果、以下のことが分かった。

- (1) 学習者の多くは、第1次で「習得」した「読み方」を第2次で使用した教材（初見の『平家物語』の1場面）に「活用」し、その場面（教材）の理解を深めていた。
- (2) しかし、「（第1次・第2次で学んだ）5場面を通じて『平家物語』が伝えたかったこと」は何かを捉え、自分の考えを書く」という「単元のまとめ」の活動については、そこでの意見にあまり深まりが見られない学習者も少なからずいた。その原因の一つは、第1次で「習得」した「読み方」（1場面の「読み方」）を、異なる文脈（5場面）でうまく「活用」しつつ「自ら考え、判断し、表現する」ことができなかったためである。
- (3) 上記(2)を改善するためには、例えば〈複数の文章から「共通点」や「共通する主題」を捉える力〉などの育成を合わせて行う必要がある。そのことで、本単元を通じた「活用力」の育成をより効果的に行うことができるだろう。
- (4) むろん、「習得→活用」といった本単元の学習を通じて『平家物語』が伝えたかったこと〉にせまり、自分な

りの意見を述べている学習者も存在する。こうした学習者の「読み方」（「活用」の仕方）を教室で共有することで、上記(2)のような学習者にもその「読み方」を「習得」させる。こうした学習をもって本単元のまとめとすれば、より効果的であろう。

## 5. おわりに

以上、本稿は、〈古典読解に関する知識・技能の「活用」に関する学習モデル〉開発の一環として、教科書教材である『平家物語』「扇の的」を用いた授業実践案を提示した。今後は、今回の課題を活かして再度『平家物語』「扇の的」の授業を行うとともに、他の教科書教材（古典）においても同様の作業を進めていきたい。

## 注

- 1 日下力（2006）『平家物語転読 何を語り継ごうとしたのか』（笠間書院、279～280頁）。

[第2次・補助教材]

「1」教皇最期 「一の谷の合戦の終盤、源氏方の歴戦の勇士熊谷直実、自分の名をあげるため、身分の高い平家の大將と戦たいと考えていた。そんな時、舟に逃れようとする人々の中に、平家の大將軍と思われ、武士を見つめる熊谷はその武士を取り押さえ、首を斬ろうと顔を見ると、年はまだ幼さが残る十六・七歳、ちょうど息子、小次郎と同年代の美しい武士だった。そのため熊谷は、とても刃で斬ることができないのであった。

熊谷「あつぱれ、大將軍や。この人一人討ちたてまつたりとも、負へき戦に勝つべきやうもなし。また、討ちたてまつらずとも、勝つべき戦に負くこともよもあらじ。小次郎が薄手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆きたまはんずらん。あはれ、助けたまつらばや。」と思ひて、後ろをきつと見れば、土肥・梶原五十騎ばかりで続いたり。熊谷涙を抑へて申しけるは、「助けまらせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞のごとく候ふ。よも逃れさせたまはし。入手にかけま

熊谷は、「ああ、立派な大將軍なのだなあ。この人一人をお討ち申し上げたとしても、負けるに違いない戦に敵(平家)が勝てるわけもない。また、討ち申しあげなくても、勝つに違いない戦に我々(源氏)が負けることはないだろう。息子、小次郎が軽傷を負っているでせう。(親である)直実は、つらく思うのに、ましてこの殿の父上は、千鳥が討ち取られてしまつたと聞いて、どれほどお歎きなされることだろうか。ああ、助け申上げたい。」と思つて後方をきくと見ると、(源氏の武將である)土肥・梶原が五十騎ほどでやつて来る。熊谷が涙をおさえよて申すには、「助け申上げようとは存じますが、味方の軍兵が雲霞のようにおります。決してお逃れになさることはできないでしよう。他の人の手であなたの首を斬る

土肥・梶原  
源氏の武將、土肥実平、梶原景時。  
雲霞のごとく  
人が群が、かたがたを倒さる。

みらせんより、同じくは直実が手にかけまらねば、後の御孝養をこそつかまつり候はめ。」と申しければ、「ただ、どくどく首を取れ。」とぞのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず、目もくれ、心も消え果てて、前後不覚に覺えけれども、さてほもあるべきことならねば、泣く泣く首をおかしてんげる。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、何とてかかる憂きめをばみるべき。情けなうも討ちたてまつるものかな。」とかきくどき、さめざめと泣きあたる。

ことになり、同じことならば直実の手によつて首を斬り、その後、あなたの後世を祈る(供養)してさしあげましょう。」と直実が申し上げたこと。ただ、早く早く首を取れ。と若武者はおつた。熊谷はあまりに可哀そうで、どこに刀を立てたらよいかわからず、目もくらみ、分別心も消え果てて、前後不覚に思われたが、そうしてばかりもいられないので、泣く泣く若武者の首を斬つてしまった。「ああ、弓矢を取る身ほど残念なものはない。武芸の家に生まれなければ、どうしてこのようつらい目に遭うことがあろう。情けなうも討ち申上げたものだな。憎い言をくどくどと言ひ、さめざめと泣き続けていた。後に聞くと、若武者は修理大夫経盛の子息の教皇といひ、十七歳になつて出陣(志)はますます強くなつた。

経盛  
平清盛の弟、平経盛の子息  
志はますます強くなる。

「2」知章最期 生田の森の戦いで源氏に破れた平家は、屋敷に向かつて船で逃走することになった。平家方の新中納言知盛(平知盛)は、息子である武藏守知章(平知章)、平家の家人である監物太郎頼方と共に、大臣殿(平宗盛)の乗る舟と逃げていた。そこに源氏の進手が迫つてきて、知盛の首を斬ろうと馬を寄せくる。

御子、武藏守知章、父を討たせじと、中に隔たりおし並べ、むずと組んでどうと落ち、取つて押さへて首をかき、立ち上がりんとし給ふところに、敵が重、落ち合はせて、武藏守の首をどる。監物太郎、落ち重なり、武藏守討ち奉つたりける敵の重をも討ちてげり。その後、矢種のあるほど射尽くし、打物抜いて戦ひけるが、弓手の膝口をしたたかに射させ、立ちも上がらで、みながら討死にしてげり。このまきれに新中納言知盛は、そこを

(新中納言知盛の子である武藏守知章は、父を討たせまいと父と敵の間に入つて馬を並べ、敵とむずと組んでどうと馬から落ち、敵を取つて押さえてその首を斬る。しかし武藏守知章が立ち上がりようとなす所に敵の重がやつてきて、武藏守の首を斬る。監物太郎は、その重の上に乗るようになり、馬から落ちて、武藏守を討ち取つた敵の重をも討ちてしまつた。その後、監物太郎は矢のあるだけ射さし、刀を抜いて戦つた。しかし左の膝口を射られ、立ち上がることもせず座たまま討死してしまつた。この間に新中納言知盛はそこを逃げ延びて、強くて長く走ることできる名馬にお乗りなされた。その馬に二十騎町泳がせて、大臣殿の

弓手の膝口  
左の膝口し。  
監物太郎  
長人をもこのつとある馬。  
二十騎町  
一町は約109メートル。

御舟へぞ参られける。その後、新中納言知盛、大臣殿の御前におはして、涙を流して申されるは、「武藏守にも連れ候ひぬ。監物太郎をも討たせ候ひぬ。今は心細うこそまかりなつて候へ。されば、子はあつて、親を討たせじと、敵に組むを見ながら、いかなる親なれば、子の討たるを助けずして、これまで逃れ奉つて候ふやらん。あはれ、人の上ならば、いかばかりもどかしう候ふべきに、我が身の上になり候へば、よう命は惜しいものにて候ひけり、今こそ思ひ知られて候へ。人々の思召さん御心の内どもこそ、取つかしう候へ」とて、鎧の袖を顔に押し当てて、さめざめと泣かれければ、みな鎧の袖を濡らされける。

御舟へと参りなされた。その後、新中納言知盛は、大臣殿(平宗盛)の御前にいらして、涙を流して申されるは、「(子ともである)武藏守にも死なされた。」「(武者である)監物太郎も討たれました。今は心細くならず候ひます。いたたいどういふわけで、子どもがあつてその子が「親を討たせまい」と敵と勝負するのを見ながら、どんな親であれば、子どもが敵に討たれるのを助けずに、このように逃げ参つてくるのでしよう。ああ、これが他人の事でしたら、どれほどか非難したく思うにちがひありません。自分自身の事になりましたと、命というものは惜しいものであると、今こそ思ひ知らされた。(子どもを見捨てて逃げた親だと人々が思いになる心のうちが取つかしうございます。と鎧の袖を顔に当ててさめざめと泣かれると、周りの皆も鎧の袖を濡らされた。

【3】「小宰相身殺」 敗走する平家の舟の中で、小宰相は夫である平通盛が戦死したという報を受ける。はじめは信じて居るが、

夫のやりとりを次のように語る。『戦いの前夜、夫はつちも心細そうに嘆いて、『明日の戦いで、きと討たれるだろう。私が死んだら、その後、あなたはどうなれるおつもりか。』と云う。』

「静かに身となつて後、幼き者をも育てて、亡き人の形見にも見ばやどは思へども、幼き者を見んたひどには昔の人のみ恋しくて、思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。つひにはのるまじき道なり。もし不思議にの世を忍び過ぐすども、心に任せぬ世のならひは、思はぬ他の不思議もあるぞとよ。それも思へば心憂し。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにかくに人を

「静かに子どもを生んだ後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

恋しと思ふより、ただ水の底へ入らばやど思ひ定めてあるぞとよ。そこに一人どまつて嘆かんずる事こそ心苦しけれども、わらはが妻東のあるをば取つて亡き人の御菩提をもとぶらひ、わらはが後生も助け給へ。』

「静かに子となつて後、幼き者をも育てて、亡き人の形見にも見ばやどは思へども、幼き者を見んたひどには昔の人のみ恋しくて、思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。つひにはのるまじき道なり。もし不思議にの世を忍び過ぐすども、心に任せぬ世のならひは、思はぬ他の不思議もあるぞとよ。それも思へば心憂し。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

【4】「先帝身殺」 元暦二(一一八五年)三月二十四日、豊前国門司赤間関で源平の合戦が行われた。源氏の軍勢は次々と平家方の舟に乗り移り、多くの人を斬り殺す。平知盛は安徳天皇の舟に行き、「もはやこれまじと敗戦濃厚の戦況を告げる。

二位殿は、この有様を御覧して、日ごろ思召し申うけたる事なれば、鈍色の二衣うちかつき、練袴のそばは高くはさみ、神書をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上を抱き奉りて、わが身は女なりとも、敵の手にはかからまじ。若の御供に参るなり。御心ざし思ひ参らせ給はん人々は、急ぎ馳せ給へ。』とて、舟端へ歩み出でられけり。主上、今年には八歳にならせ給へども、御年の程よりはるかにねびり輝くばかり也。御髪黒うゆらゆらとして、御背中過ぎさせ給へり。あきれたる御さまにて、

「尼せ、われをばいつちへ具してゆかんとすぞ。」と仰ければ、いとけなき君に向ひ奉り、涙を押へて申されけるは、「君はいまだ知り召され候はずや。先世の十善飛行の御力によつて、今方衆のあるじと生まれさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでに尽きさせ給ひぬ。まづ衆に向はせ給ひて伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、その後西方浄土の来迎にあづからんと思召し、西に向かはせ給ひて、御念仏候ふべし。極楽浄土とて、めでたき所へ具し参らせ候ふぞ。」と泣く泣く申させ給ひければ、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さくうつくしき御手を合はせ、まづ衆を臥し拝み、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、その後西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがて抱き奉り、「波の下にも都の候ふぞ。」となくさめ奉り、千尋の底へ入り給ふ。

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

「静かに子となつて後、幼い子を育てて、その子で亡き夫の形見として見たいとは思ふが、幼子を見る度に昔の人(亡き夫)のことがかりがたしく、物思ひの数は積るとも、慰むことはよもあらず。死は、最後には逃れられない道である。もしも思ひがけなく、の世を過れ過ぐすこともあつたとして、思うに任せぬ世の常として、再婚などという思ひもかけぬ別の出逢事もあるもだよ。それを考え、みんご嫌なことにだ。まどろめば夢に見え、覚れば面影に立つぞかし。生きてゆくにあれこれと夫を

山鳩色 山鳩色の御衣、山鳩色とは山鳩の羽の色を指す。ここでは、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さくうつくしき御手を合はせ、まづ衆を臥し拝み、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、その後西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがて抱き奉り、「波の下にも都の候ふぞ。」となくさめ奉り、千尋の底へ入り給ふ。